
紀元前 4 6

イナリズーシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紀元前46

【Nコード】

N4594M

【作者名】

イナリズーシ

【あらすじ】

前世の記憶を思い出していく少女の話。ゆるゆるバージョン。カチカチバージョン。マニアックバージョンでそれぞれ違う感じで書いていこうかと一応計画

普通の日本家屋の屋敷

少女が一人、グースカ昼寝してました。

背後から忍び寄る影・・・

でも誰も居ない。

と、その時、少女は目覚める。

周囲を見渡し、周りに何も居ないのに居るかの様に逃げ惑う。

時間は昼間。

明るい部屋でまるでオバケが出たかの様にパニックを起す。

9 j 2 m g p b ; r m g 9 4 3 ; g : l f j q w n ; : . a @ ' ' @ @
 @ @ @ @ a k h a o a e e g e a e r j g a o w j g ' ' e a 9 4 3 9
 3 9 r 2 m b k b ; g p a j u b 9 u t v n q 3 4 n g y 3 t n y v
 5 o i v n i o i h n h m 9 8 3 q 4 o v 9 m 5 h c , 0 2 9 u t k
 y , h q 0 2 3 9 4 ヴ , c h 3 q c 3 q 0 3 0 9 2 t c c y 5 3 j
 l k f n g k j c r n t g k j p p y y j 5 j

少女の脳内に何かのノイズが入り込んだ。目を白めにして瞼をパチパチさせる。

その間約15秒。少女は一粒の涙を零した。

” どうして・・・

どうして私はあの時自殺してしまったのだろうか・・・”

少女の過去が巻き治される。

遠い昔、約2000年前の記憶。

全ての時間が巻き戻されるかの如く。

その時に見えたのはクレオパトラ。それが自分。

自らの手で自殺をした。

誰も死ぬ理由を知らぬまま、ただ、自己満足の為に死を選んだ。

転生し不老不死を得る為、いさぎよく失敗を認める為、責任を取る為。

だけど、責任とは何か 責任の意味を 死ぬときの私は全く理解していなかった。

死した直後から私の懺悔は始まった。

いつも私のために着替え等の身の回りの世話をしてくれる彼女。

彼女が私の死体を最初に発見した者であり、そして私の自殺に最も苦しむ者だった。

” 私は毒蛇を自殺に使う為 彼女に持って来させていた”

次に苦痛を味わせたのは息子のリオン

”なぜ、親である私は子供を捨てて逃げた！ 馬鹿にも程がある！”

そしてアントニー・・・

全ての不の連鎖はここから始まったと言っている。

そしてその連鎖のキツカケは全て私から始まっていた・・・

ごめんなさい・・・

許してみんな・・・

1（後書き）

書き終わるのは1年後くらいかなw

ちなみに題材としているのが京本20先生作の『前世の記憶』となります。

ネタばれ含めて物語が気になる人は、そちらをご覧ください。

いきなり番外編 本編とは全く違う

大きなデカイ屋敷。そしてミスボラシイ屋敷。

少女が一人、グースカ昼寝してました。

背後から忍び寄る影・・・

でも誰も居ない。

と、その時、少女は目覚める。

周囲を見渡し、周りに何も居ないのに、居るかの様に逃げ惑う。

時間は昼間。

明るい部屋でまるでオバケが出たかの様にパニックを起す。

9 j 2 m g p b ; r m g 9 4 3 ; g : l f j q w n ; : : ア @ 「 @ @
@ @ @ @ ア k ハ オ ア エ ゲ ア エ r j ガ オ w j g 「 エ ア 9 4 3 9
3 9 r 2 m b k b ; g パ ジ ユ b 9 ウ t v n q 3 4 n g y 3 ツ n y v
5 オ イ v ニ ヨ イ h ノ h m 9 8 3 q 4 オ v 9 m 5 h c 、 0 2 9 ウ t k
y 、 h q 0 2 3 9 4 ヴ 、 c h 3 q c 3 q 0 3 0 9 2 t c c y 5 3 j
l k f n g k j c r n t g k j p p y y j 5 j

少女の脳内に何かのノイズが入り込んだ。目を白めにして瞼をパチパチさせる。

その間約15秒。

少女はそのノイズから解放されて何事無かったの様に、また、恐れパニックを起しはじめた。

目と耳をふさぎ込み、押しれの中に隠れ、何かがどこかへ去るのを待ち続けた。

20分後、その気配は消え去り、少女は安堵して押入れから出来

た。

冷や汗まみれのであるが、時は夏場でエアコンの無い時代。部屋の温度は30度を超えていて、汗まみれになっている。

く後書きく

その汗は、本当に冷や汗ですか？

く前世の記憶く

少女は、その日から少し変になった。

急に歴史に興味を覚え始め。前世の記憶に関する書物を読み漁る様になった。

歴史を知るほどに自分の過去の記憶が蘇った。

少女には前世の記憶が見えていた。それは原始時代から始まる記憶。

そしてなぜか、遙か未来50年後、2028年の未来が見えていた。

未来では、巨大隕石が地球に接近し人々に混乱が及び、そして不老不死の技術が開発されて、人々は異質な生活を送るのが見えた。

人々は宇宙船に乗り込み。火星、木星、土星を眺めていて、人々の姿形は異型。

当時の彼女には、それは異型であるが、現代ではある程度予測可能なあり方に違いない。

その事に気づかない彼女は、幻や幻覚だと思い込み、いつしか普通の生活に追われ、結婚し子供を生み幸せな日々を送る。

かに見えたが彼女は包丁を持ち 真剣な眼差しで刃の先を見つめている。

顔面蒼白で、息を荒げ、鼻から汗が滴れ落ちる。

落した汗は、床に落ち、畳をぬらした。

目の下から涙を浮かべる。

部屋は静まり返り、古い電機がカチカチと寿命を知らせる。

とその時、鬼の様な形相で彼女は家を飛び出した。

向かう先は、姑の家。

彼女は、姑にプリンを食べられたショックで実家へと帰り、憎悪にとりつかれていたのだ。

いつ、殺そうかかと思案した拳句に、ついに行動を起して飛び出したのだ。

「止めなさい！ 妹よ！」

セクシーな姉、細記数子が身を呈して止めに入った。

無意味にロングストレートヘアをなびかせる。

グサリ！

姉ちゃん刺さりましたー！

鮮血が壁一面に吹き飛ぶ。

その正体は、ケチャップソース。

「これからオムライスを食べうのだから、手伝え！！」

「え？ 姉ちゃん。今日のご飯はオムライスなの？ わーい！」

、、*、*

2人は何事も無く、その日を終えた・・・

彼女は包丁を持ち、真剣な眼差しで刃の先を見つめている。
顔面蒼白で、息を荒げ、鼻から汗が滴れ落ちる。

落ちた汗は、床に落ち、畳をぬらした。

目の下から涙を浮かべる。

部屋は静まり返り、古い電機がカチカチと寿命を知らせる。

と那時、鬼の様な形相で自分の腹に刃を突き立て様とした。
彼女は、腹が痒かったのだ。その痒みの苦痛で、憎悪にとりつか
れて、自殺を図ろうとした。

「止めなさい！ 妹よ！」

セクシーな姉、細記数子が身を呈して止めに入った。
無意味にボインをなびかせる。

グサリ！

姉ちゃん刺さりましたー！

今日は、ほんとに刺さりましたー！

「腹の中に子供が居るだろうが馬鹿！！」

「え？ あ？ 忘れてたー（。。。）

2人は何事も無く、その日を終えた・・・

（この5年前の話）

当時、19歳の彼女は、旦那候補と出会ったばかりでした。
そして今日は、デートを予定している。

「細記ジュニアさーん！ お待たせしましたー！」

公園のベンチで待ち合わせした2人。

目の前に現れる彼の姿は馬でした。

白馬の王子ならぬ、そのまんま馬です。白い野良馬です。

2人が出会ったのは、さかのぼる事、数日前。

道場に偶然落としたハンカチを馬が拾ってくれたのです。

「ヒヒーーーーん！　じゃあ、行きましようか、細記さん。」

2人は、互いにまだ知り合っても間もない。1メートルくらいの距離を空けて並んで歩いています。

その後、二人は喫茶店の中でお茶をしている、

馬はヒズメを使い器用にカップをに握る。

「ひひーんひーん　ブルブル」

2人の笑顔がそこにありけり。

と、突然、謎の美女、ボイン横を過ぎ去っていく。

「ひひひひん！　ひひひひん！」

馬は明らかに興奮気味。

それを見た細記ジュニアは嫉妬し、そそくさと返ってしまう。

帰り際に

「畜生目！　馬の癖に！！」とぼやきつつ・・・

数日後、馬から電話が掛かってくる。

「馬だったら、私は留守って事にして〜」

とジュニアは姉ちゃんに頼むが居ると言う。

渋谷電話に出るジュニアは、映画に行こうと誘われる。

まあ、いつか、おごってくれるっていうし、見たい映画だし・・・

翌日

馬と一人は暗闇で映画を見てます。

そこへチンピラが絡んできた。

「おおゝ可愛い姉ちゃんじゃねえか。この映画終わったあとどうよ。俺らとデートしようぜ」

肩に手を寄せるチンピラ。

恐怖したジュニアは横目で馬を見る。

馬は反対方向を見つめ口笛を吹いている。汗だくで必死に他人の振りをかます。

失望

番外編つづく

ゆるゆる 1

「これを買物だと言ってカエサルに渡して頂戴」

クレオはカエサルの屋敷の外でじゅうたんにグルグル巻きになった状態で言った。

兵士はキョトンとする

「クレグレも中に私が入ってる事は誰にも教えるな」

兵士5人は、カエサルの元に買物を持ち連れて行く。
壁に何度かぶつけられ、たどり着く。

「エジプトの王女クレオさんからの買物です。」

地面に落とされるクレオ

じゅうたんモゾモゾ、オープン

「おっちゃん、ひさしぶり」

「うわああ」

「どう？ ビックリしたおっちゃん？」

「そりゃあ、ビックリするわ！」

「ところでおっちゃん・・・

「なんだいきなり

「おっちゃん！ すまんけど、私つを助けてくれ。

「いきなり、どうした？」

「パパが死んでさ、いま、私が王様じゃん。でも、女ジャン。女の王だから他国に舐められても困るし、背後におっちゃんの権力があるのを、世界に知らしめてくれない？」

「いいよー！ でも、その代わり抱かさせる」

「やったー！」

クレオはカエサルに肩車される

「お！ 重い・・・

崩れる。

「昔の様にはいかな。

「だねw

2人は別々の国を統治する者である。クレオはエジプトの王でカエサルはローマの大統領みたいな感じで親戚であった。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:PietrodalCortona-Lyon.jp>

こんな絵なかんじで、ローマとエジプトは仲良しですよーというのが世界にアピールした。

次にピラミッドの工事を行たクレオ

「なあ、幼馴染よ。どうせ作るなら先代よりもっと凄いピラミッドを作りたいのだけどどうすりゃええの？

幼馴染「そうだな・・・とりあえず、聞いてくる。ちょっとマッシュ
テテ

数日後

幼馴染「専門家に任せれば良いと思うよ。信用の置ける技術者を既に見つけてるから。このセバスタンを利用すればいい。あと、労働者たちを呼び込むのも任せとけば良いと思うセバスタン会議が開かれる。

なにやら難しい言葉を並び立てて議論を立て白熱するも、読者には見えない。

ローマに呼びかける貿易師

「小麦を大量に買え〜」

他国に呼びかける求人師

「飯が食えるよ〜 小麦で当日現物しきゅうだよ〜 住む戸用意、自給・・・で超お得だよ〜 わんさか人が集まる。」

舟漕ぎ師の船にのり込みわんさか

3000人くらいくらいが、あらゆる土地から集まる。

労働者は小麦受け取り働くを繰り返し、弁当を受け取る。

「さんきゅー幼馴染。ついでに幼馴染のも作るつか？」

「ええのん？ 結構かねかかるよ。」

「ええよええよ。幼馴染の中じゃんか」

ピラミッド建設計画終了

2人は何度かピラミッドを見に行くも専門家の難しい説明に訳が判らず直ぐに飽きた。

「ほら、星が綺麗だね」

「あ、流れ星――w」

飽きた二人は星を眺めていた。

ナ

こんなチャランポランな王でも実際は結構頭が良かった。
7ヶ国語話せるし歴史にも詳しい。

普段は真面目に貿易の仕事なんかも頑張っちゃってるよ。
まあ、金持ちだから、他にやる事無いだけですか・・・

カチカチ 1

紀元前 46

クレオパトラ 約 25 歳

クレオのパパが死んで葬式に来た世界各国の要人。

葬式が終わり要人達はエジプトの国内のそれぞれの別荘地で滞在していた。

その中にローマの王カエサルが居るのだが、その元へクレオが手土産を持ち訪問する。

「これを買物だと言ってカエサルに渡して頂戴

クレオはカエサルの屋敷の外で籠中に入り込みビックリ箱になる。

兵士はキヨトンとするも一国の王なので逆らえない。

「クレグレも中に私が入ってる事は誰にも教えるな」

兵士たち 5 人は、カエサルの元に貢物として連れて行く。

丁寧に扱われゆつくりと王座の御前にそれはたむけられる。

「エジプトの王女クレオさんからの貢物です」

「中身は一体なんだ？」

「・・・・・・」

兵士は目を背ける。

答えないけど答えられない。

と、その時

クレオはジャンと飛び出した。

一同沈黙。

兵士 白々しい目。

それもそのはず。貢物という単語にエジプトの女王が淫乱でフシダラな女だと兵士の目に映ったのだ。

ギャグが受ける訳がない。

「あははは」

笑うカエサル。

ソレもそのはず、カエサルとクレオは親戚である。

反面、兵士はカエサルのそのリアクションに人として王としての不信感を抱いた。

カエサルは女遊びが好きだし、クレオともそういう仲だと思ったのだ。

自分たちが必死で働いているのに、いちゃつきぶりに腹を立てた。だが、兵士は我慢する。

疑問や質問はしてはいけないルールなのだ。

そうして事情の知らない兵士からクレオの悪説が少しつつ、そして確実にローマに広がっていく。

「してエジプト国の王女よ。今日はイキナリどうしましたしましまさ

「おじ様、そのギャク変~~~~w

「うんぬ。しかし、この度は大変でしたの。そうして明るく勤める様子から察するに少しは・・・

クレオは泣いていたが隠していた。

「そうそう強い者である訳には行かぬな。もっと近くよれ。

クレオはカエサルへ歩み寄る

「しばらく二人だけにしてくれ」

カエサルは付き人に命令する。

と、言うのは嘘よーん。

この時のクレオパパは死んでからミイラ化するまで結構時間あったし、病気で先が短いの判つてたから覚悟する時間は一杯あったのね。

今日はあくまで、仕事の一環としてこのカエサル邸に来たのでした。

以下は、職務上のツマラヌ会話に成りますので読み飛ばしてください。

「ツマラヌ文章」

「うんぬ。しかし、この度は大変でしたの。そうして明るく勤める様子から察するに少しは・・・」

「既に父上の死は乗り越えて御座います。もう、昔の様な泣き虫ではありませんよ」

「泣きすぎるのでは我としては良かったのだが・・・まあ良い。しばらく二人だけにしてくれ」

カエサルは付き人に命令した。

「さて、葬儀の場では無く、わざわざこうして我のもとへ来たという事は何か政治上の事ですか？」

「察しの通りです。」

「とりあえず言ってみよ。」

「はい・・・実は王を継承する事に対して自信が無いのです。」

「どういう風に？」

「私は武力が嫌いです。大切な労働力を失う事は国の発展を妨げるものと思っています。しかし、王が女である以上、民や他国からも信用されないのには無いかと・・・」

「そうか・・・しかし、余り考えすぎない方が良いでしょう。女が納める国を狙うというのは戦争を仕掛ける者の恥である故に、寧ろ安全というものだ。」

「は・・・はあ。」

「だが・・・最善を尽くすに越したことはない。出来る限り力を貸しましょう」

「よろしいのですか？ おじ様！ いえ、カエサル様

「まあまあ、こういう時だけ敬語を使いなさるな。我はエジプトの永遠なる味方なのだから・・・」

「勿体ないお言葉です」

「もうよい。その話し方虫唾が走るわ

2人は笑った

その後、カエサル指揮の下で調印式が行われエジプトは安定した。
クレオは国王としての仕事に黙々と励む日々を送った。

く幼馴染の存在感く

前書き クレオパトラⅡネフェルティ

会議ではへいつも居る。

重要な時もそうでない時も
画面のフレームに入っている。

「ネフェルティをどう思っているかですか？」

「そうです坊ちゃま」

「どうって・・・私は別に

「好きなんでしょう」

硬直

「判りやすい方ですね・・・

「しかし、私がどう思おうとも彼女にはそんな気は無いよ。名前で
呼ばれることなんて一度もないし・・・そもそも覚えてなかったし・
・

「それは爺も存じております。

」でしょ。

「ですが爺は、このまま坊ちゃまが結婚も成されず一人で居るのが心苦しいのですじゃ

」・・・

「試しに結婚を申し込んでみてはいかがでしょう。

」なっ！…何を馬鹿な事を！

「馬鹿ではございませぬ。万に一つでも可能性があったらどうするんですか？ 何もしなければ何も起こりませぬぞ。」

「よし、判ったよ。やってみる」

晚餐にクレオ招待した。

でも、切り出せない。

「結婚しないの？」

死んだ旦那の事の話になって気が重くなる。

やはり諦めてしまふ。

友達として接する事にふんぎる事に。

そう決断したら気が軽くなる。

王宮に出向く幼馴染。

「最近、仕事入れすぎじゃないか、息抜きに遊びに行かないか？

「え？ でも、しばらくは仕事入れてるし・・・。」

「そんなの 誰かにやらせておいてもいいだろう。どこか遊びに行こうよ・・・。」

「でも・・・やっぱり・・・私がないと・・・またいつかね」

遊びより仕事をとられる。

クレオ7ヶ国語ペラペラで仕事るばかりで幼馴染は溜息。

ピラミッド建設完了時にて

クレオ「出来てきたね」

幼馴染「そうだね。ところで・・・シチリアで美味しい豆料理見つけたんだ。この時期は風が涼しいしちよつと遊びに行かない？」

「おお凄い！ あんなデカイのてっぺんにどうやって運んだのだろうね。」

聞いてません

「シチリ

走り出すクレオ

「うわわ！ 表面ツルツルだ」

専門家の話を聞き夢中になる。

「未来の人々は このピラミッドなどを見て さぞかし びっくりするでしょうねえ」

「そ・・・そうだね。」

笑うクレオと苦笑いの幼馴染。

マニア1

エジプト国王クレオパトラの父の葬儀の場にて、
独り言をしているクレオ

「そついえば父上と一緒にいた思い出つてそんなに多くないな。
いつも公務ばかりで
最後に話したのいつ・・・」

〈過去回想〉

星の観測所にて、おぼろげに父が自分に話しかける姿が見える。

「何はなしたんだけ？
結構最近の事なのにおぼえてないな・・・」

〈過去回想 子供の頃〉

王宮内

「今、帰ったぞ。」

「父上酒臭いよ」

「大丈夫大丈夫」

「何が大丈夫なのさ」

そうだった。

父上、いつも公務が急がしくて相手して貰えないけど、一日一回必ず抱きしめてくれた。

〈過去回想 更に昔で子供の頃〉

クレオは両親一向とローマのカエサル邸に向かっていた。

パパ「久しぶりに叔父さんに合うんだからな。ちゃんとしないと駄目だぞ？」

クレオ「あい。ってか叔父さんって何？」

パパ「叔父さんと言うのはお父さんのお兄さんという意味だよ」

ママ「そうよ、叔父さんには失礼の無いようにカエサル様と言うのよ」

クレオ「あたしとカエサルさん会ったことあるの？」

ママ「ええ。赤ちゃんのときとか 高い高いして貰ったのだから」

〓 プチ回想 カエサルに高い高いして貰って、おしっこを掛ける〓

「うは~~~~！」

高度リアクション

「シヨッペエ！」

背中にオンブして走らされるカエサル。

そしてダウン

「兄さん、戦士なら諦めたちゃ駄目だよ

〓 プチ回想 END 〓

クレオ「全然、覚えてないよ」

パパ「そりゃそうだ。」

ママ「そうよね」

笑う両親

クレオは何で笑われてるのか判らない。
キョトンとしている。

「ちよっ何が可笑しいの？　ねえってば」

馬車はひた走り、ローマに到着

門を通り抜け降り、待ち人に迎えられ宮廷へと案内される。
緊張したおももちのクレオ

時はながれて

王宮内にて

「ほくらほらほら」

「叔父様、すごい」

クレオはカエサルの筋肉質な腕に捕まっている。
腕を上下に動かすカエサル。

ママ「御免なさいね。クレオったら遠慮が無いもので

カエサル「まあまあ、この筋肉にいずれ衰える。今のうちに有効活用しときませんな。」

ママ「有効活用って」

笑う

〳回想おわり　葬儀場所にて〳

クレオの心の呟き

そういえば、あの時も父上は公務で居なかったな・・・。

唯一の一緒に一日過ごした日だと思っていたけど、過ごしたのは
カエサルだったか・・・。

父上は本当に忙しい方だったな・・・。あれ程までしなければ王
は務まらないのだろうか、私は王として勤めが果たせるのだろうか。
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594m/>

紀元前 4 6

2010年10月9日12時42分発行